



2009年2月15日発行（隔月刊）



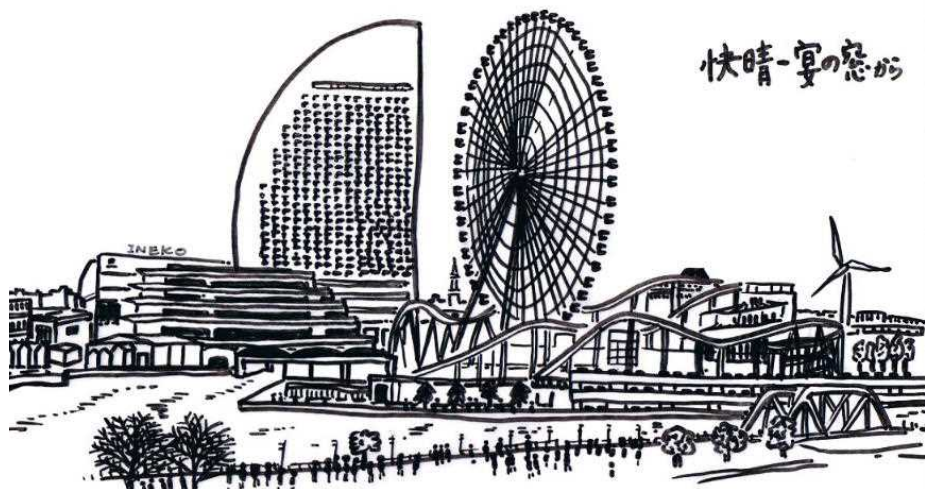
う 羽 化 か

ISSN1880-8646

2009年2月

第 72 号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久

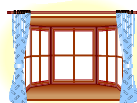


目 次

漢点字の散歩（11）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（68）（山内 薫）	7
『日本と中国』新春提言（村田忠禧）	9
漢字の歴史と「説文解字」	11
一 言（岡田健嗣）	15
東京漢点字例会報告とわたくしごと（木村多恵子）	17
東京漢点字学習会報告（菅野良之）	21
漢文のページ	25
漢点字講習用テキスト（初級編・第13回）	27
ご報告とご案内	29
編集後記（木下和久）	31

漢点字の散歩（十一）

岡田 健嗣



五 点 字

本稿では、〈点字〉をご存じない皆様も、点字をパターンとしてお受け止めいただければ充分です。点字で何が書かれているかを読み取る必要はありません。

お詫びと訂正… 前号に掲げましたルイ・ブライユの点字一覧の英語の略字に、一部誤りがありました。53番「**三**」は、「**de**」の略字です。「**Id**」は誤りです。謹んで訂正させていただきます。

① 英語点字（二）

英語点字と拡張アルファベット（承前）

（冒頭部分再掲）

〈点字〉は一八二五年、ルイ・ブライユが創出した「触読文字」である。しかし彼の存命中には世に認められなかった。

当初の〈点字〉は、アルファベットをそのまま点字符号に置き換えたものだ。それでもそれまでの墨字のアルファベットを浮き出させたものに比べれば、遥かに読み易いものであった。

彼の没後、彼を慕う人たちが立ち上がって、欧州各国に〈点字〉を伝えることに努めた。その結果として〈点字〉が、アルファベットを表す符号であることが広まって、欧州各国語がそのまま表記できることが知れ渡った。

しかし人の欲は次のステップを求めた。「もっと読み易い〈点字〉が欲しい」。

確かに〈点字〉は、触読に適した文字である。が何が足りない。「そうだ、朗読ができない」。欧州の文学の習慣には、「朗読」が欠かせない。「朗読のできる〈点字〉が欲しい」。

ブライユの〈点字〉はアルファベットである。触読しながら音声にすると、ひどく間延びしたものになってしまふのであった。どうすれば「朗読」できるか、単に練習だけでは果たせないことが分かって来た。

そこで人々は、研究し工夫を加えた。

英語について見てみたい。

（以下は、英語点字の解説書による説明ではなく、英語点字の成り立ちを分析しての説明である。従っ

ルイ・ブライユの点字表

1 :	1 Aa	2 Bb	3 Cc	4 Dd	5 Ee	6 Ff	7 Gg	8 Hh	9 Ii	10 Jj	Upper4
2 :	11 Kk	12 Ll	13 Mm	14 Nn	15 Oo	16 Pp	17 Qq	18 Rr	19 Ss	20 Tt	+ 23
3 :	21 Uu	22 Vv	23 Xx	24 Yy	25 Zz	and	for	of	the	with	+ 23
4 :	31 ch	32 gh	33 sh	34 th	35 wh	36 ed	37 er	38 ou	39 ow	40 Ww	+ 23
5 :	41 ,	42 ;	43 :	44 .	45 en	46 !	47 ()	48 ?	49 in	50 ”	Lower4
6 :	51 st	52 ing	53 ble	54 ar	55 ,	56 -					
7 :	57	58	59	60	61	62	63				

て、英語点字の教本とは、説明の順序が異なる。）

アルファベットは音素（子音と母音）を表す二六文字の一並びである。その中には a・e・i・o・u という五つの母音と、二一個の子音が含まれる。子音の中にも、r・w・y のように、母音の働きを兼ねるものもある。これらが幾つか並んで、音節を作るのである。

音節とは、前回述べたように、母音を単位とした音の並びであって、英語では子音が複数個含まれるのが通常である。

欧州の言語を表す文字はアルファベットであるが、アルファベットはそのままでは語としての意味は表さない。言葉の発音を表記し構成し、その音が意味に結びついているのである。たとえば語頭に the があれば時間的に前を、post があれば後ろを、is があれば中の方を、ex があれば外の方を指示す

る。このようにして文字と意味とは、音を介して連結しているのである。そして文字の一連は、発音の規則に従って表記される。たとえば英語の語頭の子音の並びでは、s (摩擦音)・t (破裂音)・r (流音)の並びはあるが、その逆の並びはない。また、st¹、t¹が語頭に並ぶことはないなどである。

英語点字ではこのような規則を応用して、「略字 (contract)」を作った。先ずアルファベット一文字で、一つの単語を表すことから始めた。ただし、a・i・oの三文字は、一字だけで語を為しているので、残りの二三文字で単語を表すことにした。

b=but	c=can	d=do	e=every	f=from
g=go	h=have	j=just	k=knowledge	
l=like	m=more	n=not	p=people	
q=quite	r=rather	s=so	t=that	
u=us	v=very	w=will	x=it	y=you
z=as				

これらは、前後にスペースを伴うか、語頭に位置しただけ用いることができる。ただし、アポストロフイーだけは後ろに続けられる。

c't=can't	t's=that's	x's=it's
x'11=it'11	y're=you're	y'11=you'11

英語点字ではさらに、ブライユの点字一覧の31:ch・32:gh・33:sh・34:th・35:thの五個の点字符号を、それぞれを後ろに伴う単独の子音と捉えて、点字符号一文字で、他のアルファベットと同様に扱うこととした。51:stもその中に含めて、六個が増えて子音は二七個となる。それに加えて、38:ouの重母音をアルファベットの母音に加えて、母音の数は六個となる。これらの点字符号も元来のアルファベットと同様に、一つの符号で一つの単語を表す略字としても用いられるところから、私は〈拡張アルファベット〉と呼ぶことにする。

ch=child	sh=shall	th=this
wh=which	ou=out	st=still

(32:ghには、単語は当てられていない。)

このようにして英語点字では、三三文字を〈拡張アルファベット〉として、一般のアルファベットと同様に使用することとなった。後述する縮語 (short form word) にも、この〈拡張アルファベット〉がアルファベットとして用いられている

一 マス音節略字と句読符号

六つの点で構成される点字符号は、六三通りであ

る。右の（拡張アルファベット）三三個を除けば、三〇個の符号が残る。これらがどのように利用されているか見てみよう。

この三〇個の点字符号の中に、41 ～ 50、55・56番がある。このうちの前の一〇個はlower 4 dots signと呼ばれて、1 ～ 10番（a ～ j、upper 4 dots sign）の符号を下に下げた形である。55・56番を加えて、先ずはpunctuation（句読符号）として使用される。また略字としても用いられるが、用途の制限が多いので、その紹介は後ろに回す。

57 ～ 63番の点字符号は、right side dotsと呼ばれる。これらは次のマスの点字符号に前置されて、その文字の性格を表したりアクセントを付けたり、また二マスの略字を作ったりする。

以上一九個の点字符号を除くと、残りは一一個である。これらは音節を表す略字で、私は（一マス音節略字）と呼ぶ。そのうち26 ～ 30番は単語としても用いられる。加えて36・37・39・52・53・54番とともに音節文字として機能して、他の語の構成要素となる。

and 1 = land ab = abandon
stand
= for get = forget eign = foreign

tune = fortune

= of f = off fice = office

= the m = them n = then ory = theory

= with t = without

= ed lik = liked av = shaved

ucate = educate

= er soon = sooner eo = stereo

wip = wiper

= ow n = now n = owner p = power

= ar t = art = star = standard

（以下の二つは、語尾あるいは語中にのみ用いられる。）

= ing get = getting go = going

s = singing

= ble a = able possi = possible

pro = problem

41 ～ 50番及び55・56番は、punctuationとして、語頭略字として、短縮字として、また単独語として、以下のように用いられる。

= , ea r=d=read b=uty=beauty
 = ; be bb come=become =being
 ca=age=cabbage
 = : con cc te=contest text=context
 a=ess=access
 = . dis dd a=disable play=display
 a=ress=address
 = en enough a=enable t.=often
 t.is=tenis
 = l to ff d=to do a=air=affair
 e=ect=effect
 = () were gg bi.=bigger e=s=eggs
 su=e.=suggest
 = " his
 = in m=inform ma.ta.=maintain
 = fruct=instruct
 = " was by me=by me
 = com e=come =coming
 = puct=comput
 = ,

* (con) 、 (dis) 、 (com) は、語頭にのみ用いられる。(be) は、be動詞として、単独にももちいられる。ののように音節略字を続けることができるが、(been) とはい用いられない。この二つの点字符号は、双方ともにLower4であることから、触読に不適当とされる。

* (ea) 、 (bb) 、 (cc) 、 (dd) 、 (ff) 、 (gg) は、語中にのみ用いられる。他の略字の可能性のある場合は、そちらが優先される。

* (en) は音節略字として、(enough) 、 (were) 、 (his) 、 (was) は、単独語として用いられる。(in) は、単独語としても音節略字としても用いられる。

* (to) 、 (bv) 、 (into) は、単独語として用いられるが、次の語との間のスペースが省略される。

以上、駆け足で英語点字のアルファベットと、一マス略字について述べた。〈拡張アルファベット〉と〈音節略字〉という英語点字の基本的な考え方は、これではば出尽くしたはずである。次回は一歩進めて、前置符号を伴った二マスの略字と、縮語をご紹介します。

予定である。

付記…

ブライユ生誕二百年と漢点字

本稿を執筆する切っ掛けとなったのは、私たちが今使用している〈漢点字〉が、なぜか視覚障害者とその周辺（盲教育関係者と点字図書館等）の晴眼者の間では、ほとんど無視されているように感じられるところにあった。

今年はルイ・ブライユ生誕二百年に当たる。ブライユの点字の創案は、点字に関わる機関であればどこでも、視覚障害者に文字をもたらして、本が読め、字が書けるようになったこととして、その事業を賞賛し、その恩恵への感謝の尽きることがない。私も全く同感である。

ブライユの点字は各国に伝播し、各国語に適した体系に翻案された。とりわけ欧米の言語では著しく発展した。我が国では明治二三（一八九〇）年に、石川倉次によって「日本語点字」が作られたが、これは残念ながらカナ体系に留まったものだった。石川は、日本語の表記はカナ文字で充分と言い、自らもカナ文字運動に身を投じたという。教育制度が整備された現在も、触読文字としてはこの石川のカナ点字体系しか教

えられていない。

〈漢点字〉は故・川上泰一先生が世に問うた、ルイ・ブライユの流れを汲んだ、触読文字の漢字体系である。川上先生は、視覚障害者の文字は触読し得るものでなければならぬ、日本語は漢字仮名交じりでなければ充分に表現できないとの考えから、〈漢点字〉を考案し、通信教育で普及を図られた。私たちはそのお陰で、漢字の世界を知ることができたのである。文字を読まなければ分からないことがある。読んで初めて分かることがある。これを実現したのが〈漢点字〉であった。

こういう事実はこれまでも繰り返して述べて来たが、視覚障害者の多くとその周辺の晴眼者は、このような議論には耳を傾けようとならない。触読文字と漢字体系の話をし始めると、彼らは口をつぐんで時の過ぎるのを待つ姿勢になる。

この度本会では、『常用字解』（白川静著、平凡社）の漢点字訳を完成した。このことは、〈漢点字〉が無限の可能性を秘めていることを証明したものと、胸を張ってよいと考える。

有意の皆様のご理解とご支援を賜り、多くの視覚障害者が触読文字を通して、漢字の世界に歩を進める時の来ることを願って止まない。

点字から識字までの距離（六八）

『日本語が亡びるとき』を読む

山内 薫（墨田区立あずま図書館）

水村美苗の『日本語が亡びるときー英語の世紀の中で』（筑摩書房 二〇〇八）は、今、最も話題になっている本である。最近も文芸誌『ユリイカ』（二〇〇九年二月号）が、この本を巡って「日本語は亡びるのか？」という特集を組んでいる。

この本は言語の三つの概念を中心に展開されている。まず「普遍語」は、遠い昔はギリシャ語、中世にはラテン語が果たしたように、文化や技術を伝達したり継承するために存在した言葉である。それに対して個々の地域で話される母語は「現地語」と呼ばれる。そして「普遍語」を学んだ二重言語者が、翻訳という行為を通じてその内容を「現地語」に移し替え、普遍語と同じレベルで機能するようになった「現地語」を「国語」と呼ぶ。筆者は日本語が「国語」として成立した条件として、「普遍語」としての漢文を漢文訓読法などによって翻訳することで「現地語」が成熟していたこと、印刷資本主義が発達していて識字率が高かったこと、もう一つ欠くことのできない条件として西

洋列強の植民地にならなかったことの三点を挙げている。こうした条件が重なって日本は明治以降奇跡的に二葉亭四迷、鴎外、漱石などの日本近代文学という宝を手に入れることができた。

しかし現在、インターネットの普及などによつての英語の世紀に入り、近い将来、文学ですら「普遍語」である英語で書かれるようになるのではないか？という危機感がこの本の提起する危惧である。

実際、医学、物理学といった自然科学の世界では、どこの国の研究者であつても、論文は英語で書き、英語で読むのが当たり前になっている。ある県立病院の図書室に勤務している司書の話によれば、病院図書室に異動が決まったとき、ドイツ語ができないので医者への情報提供ができるのかと不安になったそうだが、実際に要求される論文等はすべて英語の論文で、今ではカルテさえも英語で書いているという。

この本の中でポーランドのカレツキという経済学者の悲劇が紹介されている。カレツキは一九三三年に、ケインズの『一般理論』にある原理を先に発見したが、その論文はポーランド語で書かれたもので、その二年後にはフランス語にも翻訳したのだが、翌一九三六年、ケインズが『一般理論』を英語で出版し、経済学の流れを大きく変えることになった。これに対して

カレツキは、ケインズに先駆けること三年前に自分はその理論を発表していたと、いわゆる「知的所有権」を主張したが、その論文もポーランド語で書いたために誰の目にもとまらなかったという。そして現在「普遍語」は英語という形を取り、地球全体を覆い尽くしている。そこで思い起こしたのは、昨年のチベットの問題の時、ダライ・ラマがテレビのインタビューに英語で答えていたことだ。世界に自分の考えを発信するためには英語で発信するということがどれほど大きいことかと考えさせられた。

さて、こうした状況の中で今後とも日本語が「国語」としての魅力を持ち続けるための方策として著者は、世界に向かって英語で発言力を持てる二重言語者のエリートを育てること、日本の国語教育は日本語が「国語」として成立した原点である近代日本文学を読み継がせることを主眼とすべきである、という二点を挙げている。

ところでこの本の終わりの方で、著者は日本語の表記法の複雑さについて言及する中で「表記法を使い分けるのが意味の生産にかかわる」という日本語の独自性について、朔太郎の詩を例にして述べている。

ふらんすへ行きたしと思えども
ふらんすはあまりに遠し

という詩を

仏蘭西へ行きたしと思えども

仏蘭西はあまりに遠し

では、なよなよと頼りなげな詩情が消えてしまい

フランスへ行きたしと思えども

フランスはあまりに遠し

では、あたりまえの心情をあたりまえに訴えているだけになってしまい。蛇足として

フランスへ行きたいと思うが

フランスはあまりに遠い

せめてあたらしい背広をきて

きままな旅にでてみよう

と口語に変えたら、JRの広告以下である。と述べ、「このように表記法を使い分けるのが意味の生産にかかわる〈書き言葉〉」は、朝鮮語がハングルに漢字を交ぜない限りは、日本語以外に存在しない。(中略) 日本語や朝鮮語のような〈書き言葉〉は一見例外的な〈書き言葉〉に見えるが、実は、その例外的な〈書き言葉〉こそが、〈書き言葉〉は〈話し言葉〉の音を書き表したものでないという、〈書き言葉〉の本質を露呈させるものである。」と結論づけている。

漢点字の必要性も自ずと明らかであると言わねばならないだろう。

『日本と中国』新春提言

地域起こしと日中友好交流とを結びつけよう

横浜国立大学 村田忠禧

以下は、横浜国大の村田忠禧先生が、日中友好協会の機関紙『日本と中国』に執筆されたものです。中国とのよき隣人関係を結ぶというのは、私達にとって至上命題です。残念ながらマスメディアの報道は、その時々々の利害やポピュラリティに左右されています。先生のご理解を通して、私達の視野の欠損が補えれば、先生のお仕事にも報いられるものと存じます。転載をご快諾下さいました先生には、深く御礼申し上げます。

中華人民共和国は今年、還暦を迎える。人の一生と違つて、中国という国家はまだ青春真っ直中。七十年代末の改革开放政策への転換で国家発展の方向を見だし、ぐんぐんと総合国力を増してきた。しかし二十一世紀に入り、沿海と内陸、都市と農村、富貧の格差拡大や環境破壊など、急激な発展に伴う負の側面も顕在化している。さらにアメリカ発の世界金融危機は、世界の加工工場としての発展モデルの見直しを余儀なくされている。中国はこれからどう進み、その内政・

外交政策はどうなるのか、世界中が注目している。洞爺湖サミット、ASEM（アジア欧州会議）、金融サミット（G20）など昨年相次いで開催された国際会議における中国の存在感は、世界経済の先行き不安が深まる中、じわじわとその「重み」を増しつつある。

中国の存在感は国際政治の舞台だけでない。教育、文化、スポーツ、旅行、労働、消費などわれわれの日常生活のさまざまな分野に及んでおり、思いもしなかったところで「中国」に遭遇するということを多くの人々が体験しているであろう。GDPでドイツを抜き、アメリカ、日本に次ぐ地位を占め、IMFの予測ではあと二年もすれば日本をも抜くとのこと。しかしそれでも一人当たりGDPではまだ日本の十分の一にも達しない。日本の二十六倍もある国土、十三億の人口、十五の少数民族を抱え、地域間の経済水準の不均衡が著しい中国を、日本人の「常識」で単純に割り切ることはできない。

いま中国では科学的発展観が提唱されている。人間を第一とする、全面的で、調和の取れた、持続可能な発展を追求するものであり、イデオロギー優先の旧来の指導思想から、実際に生活する人々の暮らしを大事にする思想へと転換しようとしている。提唱していることは必ずしも実現していることを意味しないが、ともかくその方向に向かって進むことを呼びかけている

事實は注目に値する。經濟政策において外資導入と輸出依存型の發展戰略から、内需拡大、とりわけ低所得者向け住宅建設、高速鐵道網の建設、農村を中心とする内陸部のインフラ整備などに力点を置く方向に大きく轉換しようとしている。旧來の知識では理解できない、新たな局面が生まれつつあるのだ。

注目すべき事實がある。胡錦濤政權はその發足以來、中共中央政治局の集團學習活動を實踐している。ある政策を決定するにあたり、まずその方面の専門家からの講義を受け、そのうえで政治局において討論し方針を決定していく、というプロセスを制度化しており、下部もそれを見習って同様な集團學習活動を行っている。これも科学的發展觀に基づく政治指導の具体化といえよう。

旧來の経験や知識では理解できない事態に遭遇した時、前進する意欲のある人は常に現實に向き合い、何が新しい変化であるのかを見つけ出し、対処すべき方策を考え出す。それを怠れば事態の変化を的確に把握できず、次第に現實から遠ざかってしまう。

伸び盛りの中国を固定的な観点で見えてはいけない。局部的、一時的な現象を絶対視することもできない。現實は常に具体的な姿でわれわれの眼前に登場するが、大きな流れ、全体との結びつきの中で理解しようと努めないと、脈絡のない断片的知識の集積にとどま

ってしまふ。

友好は易しいが理解は難しい、というのは一面の真理であろう。しかし真の友好は正確な理解があつて始めて實現するものであり、理解を怠った友好は誤解と失望を生み出すだけである。中国理解を促進するための多種多様な學習活動を積極的に展開する必要がある。學習活動といつても上からのお仕着せではなく、中国で起こっている事柄をしっかりと直視することであり、そこで發生していることを具体的に、ただし断片的ではなく、総合的に、ただし觀念的ではなく、正確に知ろうとする活動である。

生き生きとした學習は現實に触れることから始まる。中国を理解するうえで最も効果的なのは自分の眼で中国を観察することであり、それを実現する手段として、研修と交流の要素を盛り込んだ中国旅行を積極的に推進することを提案したい。まさに「百聞は一見に如かず」。必ず生き生きとした中国を体得できるであらう。しかし「一見」はあくまでも「一見」であつて「一切」ではない。中国という巨大国家を部分的に見だけに頼って、「だから中国はこうだ」と決めつけてしまうことは「群盲象を撫でる」に等しい。それを防ぐためには個別的な事象と全体像とを有機的に結びつける作業が必要で、それこそが本當の意味での學習であらう。実体験と理論的學習、それを有機的に結びつ

けることをしていけば、中国にたいする理解は深まるし、生きたものとなるだろう。

ここでもう一つ提案したいことがある。これからの日本の発展は国内だけに視野を限定しては難しい。アジア、とりわけ活気あふれる中国のエネルギーを積極的に取り組む方策を考えないと、日本は次第に小さな存在になってしまう。悲観することはない。日中間には地方自治体レベルでの友好都市関係がすでに330組存在もする。また大学間交流も盛んで、とりわけ中国からの留学生数は7万人（留学生の7割）にも及んでいる。日中間の密接な関係を示す他にも沢山ある。重要なことはそれらが有機的に結びついていないことである。そこで全国各地にある日中友好協会に代表される民間友好団体がこれら自治体や大学、さらには企業等とも協力しあって、「地域起こし」と「国際連携」を実現していけないだろうか。個別の力だけでは実現できないことも、連携し合うなかでそれぞれの長所を出し、短所を補いあえば、大きな成果を引き出すことができるはずである。しかも個々の地域だけでなく、全国的なネットワークを構築して連携していけば、巨大な成果を収めることであろう。

今年は中華人民共和国建国六十周年。記念すべきこの年に日中友好協会が重要な旗振り役となってくれることを期待したい。

漢字の歴史と「説文解字」(続)

前号に引き続き、白川静先生が書き下ろされ、同書の最後部に収録されている「漢字の歴史と「説文解字」」の後半部をご紹介します。
ご精読下さい。

四 「説文解字」

「説文解字」(以下「説文」という)は、後漢の許慎が篆文・籀文・古文、その他当時見ることのできた資料によって、その字形を研究し、九三三三字を五四〇の部首に分け、その部首によって字形を説明するという方法をとった字形の研究書である。また六書によって文字の成り立ちを説明し、その字の意味を述べている。字形の研究としては最も早いものであり、またその後、この「説文」に匹敵する研究はなかった。

秦が滅亡して漢の時代になると、散逸していた古い文献を蒐集・整理することが行われ、古い字形に対する知識が要求されるようになった。「説文」はその要求に応えるとともに、文字の全体がまた存在の秩序のあり方と対応するというので、当時の天人合一、陰

陽五行の思想に本づいて、一より発して三となり万象となり万物はまた十干・十二支によつて循環するといふので、最後に十干・十二支の字で収束するという方法をとつた。文字の全体を、一種の自然観に合致する思想の体系をあらわすものとして説明する。やがて「説文」の原本は失われたが、北宋時代の九八六年、徐鉉が「説文」を校訂して（書物の文字・語句の誤りを正して）「説文」の校訂本（大徐本^{だいじよほん}という）を作つた。本書の解説に引用した「説文」は、その校訂本である。

五 六書について

漢字の構成法について、「説文」の叙に六書^{りくしよ}、つまり六通りの漢字の構成法が説明されている。六書とは象形・指事・会意・形声・転注・仮借^{かしや}で、「説文」にはそれぞれその説明が加えられている。

象形とは、ものの形をそのまま象^{かたど}ること、ものの形を写し取ることである。「説文」は例として日・月の字をあげている。日はまるい太陽の形の中に、中がからっぽの輪ではなくて中身があることを示すために、小さな点を加えた。月は、月が満ち欠けするので三日月の形にしるす。大は手足を広げて立つ人を正面から見た形、女は手を前で重ねて跪^{ひざまず}いている女の人

の形である。

指事は見てすぐ理解されるように、事物の関係を示すものである。「説文」は例として上・下の字をあげている。上は掌（てのひら）の上に指示の点をつけて掌の上を示し、下は掌を伏せ、その下に指示の点をつけて掌の下を示し、それぞれ「うえ」と「した」の意味を示す。このような事物の関係についての表示を指事という。

会意は二つ以上の字の要素、象形や指事の字を組み合わせて、新しい意味を表すものである。「説文」は例として武と信の字をあげている。「説文」十二下に戈^こを止^{とど}める（兵戦をやめさせる）ことを武^ぶというとする。信は「説文」三上に「誠^{まこと}なり」とする。このような「説文」の解説には、会意について必ずしも適確でないものがある。武は戈^かと止^{とど}（趾^{あしあと}）の形で、進むの意味がある）とを組み合わせた形で、戈^こを持つて進み、戦うときの歩きかたであるから、「いさましい、たけし」の意味となる。信は人と言（神への誓いのことば）とを組み合わせた形で、神に誓いをたてた上で、人との間に約束したことを信といい、「まこと」の意味となる。

形声は音符によつてその字の音を表すものである。川や水の関係の字はさんずいを字の属する分類を示す

限定符として、それにその字の音符を加える。「説文」は形声の例として江・河の二字をあげている。江は音符は工^{こう}で、古くから長江（揚子江^{ようすくわう}ともいう）の意味に用いる。河は音符は可^かで、黄河であり、北方の川であつた。象形や会意の方法では表しがたい山河・鳥虫・草木などの事物の名は、だいたいこの方法で表す。木の名は木偏金属製^{きへん}のものは金偏^{かねへん}をつける。木や金のように部首とされている字には、そのような分類を示す限定符として用いられているものが多い。

形声の字には限定符を後になつて加えた字がある。たとえば、申は神^{かみ}のもとの字、土は社^{やしろ}のもとの字であつた。申は稲妻^{いなすま}の走る形、土は縦長の饅頭^{まんじゅう}形にまゐるめた土を台の上に置いた形で、ともに象形の字である。しかし申が「のびる」の意味に、土が「つち」の意味に用いられるようになり、字の意味が分化してくると、本来の「かみ」、「やしろ」の意味を限定するために、示（神を祭るときに使う机である祭卓の形）を加えて神・社とした。「説文」では神・社とともに会意の字としているが、甲骨文字や金文では申を神・土を社の意味に使用しており、示のちに付け加えたものであることが知られる。それで申・土は音符（声符ともいう）として用いられているだけではなく、その意味を含めて使われているので、このような関係の

ものを亦声という。

転注については、「説文」に「建類一首、同意相承^{あいしう}く。考^{これ}老是なり」と説くが、その意味があまり明らかでなく、研究者の間にもまだ一致した解釈は得られていない。「説文」では、部首の老部に収める字については、壽（寿）・考・孝など十字すべて「老の省^{せい}に從^{したが}ひ、丐聲^{かうせい}」のような形式で説明している。このことから考えると、たとえばふくらんだものを畱^{ふく}といひ、ひとつながりに連なつたものを侖^{りん}といい、畱・侖を字の要素とする字に一貫した意味が与えられているというような関係の字を転注というと解釈することができよう。同じ音符をもつ多くの字が、その音符のもつ意味と音とを共有するという関係が転注である。いわゆる六書の中で、他にこのような関係の字を一類とする規定がないからである。

畱 畱（せまる）・副（そう）・幅（はば）・輻^{ふく}

（車の矢）

侖 侖（兄弟など、なかま）・淪^{りん}（さざなみ）・

輪（より合わせたつりいと）・輪（車の並ん^{りん}だわ）

このような関係を「同意相承く」と規定することができると思われる。

仮借については「説文」に「本^{もと}」、其^その字無く、聲^{せい}

に依りて事を託す」として、令・長の二字をその例としてあげている。令は深い儀礼用の帽子を被り、かぶ跪ひざまずいて神のお告げを受ける人の形で、神のお告げとして与えられるものを令といい、「おつげ、いいつける」の意味となる。これを命令者の意味とする。長は長髪ながみの人の形で、長髪であるから、「ながい」の意味となる。これを長老の意味とする。仮借は、字形として表したいものを、同じ音の別の字の音のみを借りて表すことであるが、令・長は音のみを借りた字ではない。このような意味の関連があるものではなく、たとえば代名詞や方位の名のように、はじめから字形として表すことができないものを、同じ音の字を借りて表すことを仮借という。我はもと鋸のこぎりの形、余はもと把手とつてのついた長い針の形であるが、我と余をそのものと意味とは関係なく、一人称の「われ」の意味に用いるのは、その音を借りる仮借の用法である。東は上下を括くくった橐ふくろの形、西は鳥の栖すの形であるが、方位の名の「ひがし」と「にし」の意味に用いるのは仮借の用法である。仮借は字の構成法ではなく、字の用法をいう。

以下、「説文解字」のほかに、解説本文中に引用した主な文献についても簡単に紹介しておく。

「詩経」 紀元前九世紀～前八世紀ころを中心として、

中国の古代歌謡三〇五篇を集めた書。各国の民謡や貴族社会の儀礼・宴遊歌、周・魯・商の廟歌。

「書経」 堯・舜の神話時代から周代までの記録を集録した書。「詩経」に次いで古い文献。

「周礼」 周代の官制を中心とした制度を述べた書。

「礼記」 祭祀・儀礼・喪葬・教学などの礼に関する記録。

「春秋左氏伝」 魯国の編年史「春秋」のために左丘明が著した伝（解説）。史実を詳しく述べている。

「論語」 孔子とその弟子たちの言行を記録した書。

孔子の言動には、そのすぐれた人格を思わせるものが多く、のち儒教の經典とされた。

「孟子」 戦国時代の魯の孟軻の編纂した書。

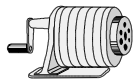
「爾雅」 漢代に成立した中国最古の字書。古い経文の注を集めて、字の意味などを記している字書。

「広雅」 魏の張揖が著した訓詁形式の字書。「爾雅」を基にし、これを増補したもの。

「玉篇」 顧野王（六世紀の人）が著した字書。「説文解字」を増広し、一万六九一七字を収める。字形の説明はなく、音と意味を記した字書。

一言

岡田健嗣



《「いつもより1、2両前すぎますわ」／2両目に乗っていた伯鶴さんは、一緒にいた落語作家の男性（59）にそう話した。いつもは4両目付近に乗っている。自宅最寄りの三国駅では、改札に通じるエスカレーターに一番近いからだ。／「後ろに行きますか」と男性が尋ねると、伯鶴さんは「慣れてるから大丈夫」と答えたという。／上方落語の定席「天満天神繁昌亭」^{はんじょう}での寄席が8日に控えていた。この日は打ち合わせを兼ね、男性らと計3人で大阪・梅田で会食した帰りだったという。／淀川署によると、伯鶴さんは下車した後、白いつえを持ってエスカレーターのある南の方に歩いたが、突然向きを変え、北側のホーム先端に向けて点字ブロックの上を歩き出した。電車が動き出した直後、線路側へずれて車両へ近づいていき、電車に接触。ホームと車両の間に体の一部を挟まれたような状態のまま、約15メートル引きずられていったという。／駅によっては、点字ブロックの横に、どちらがホームの内側かを示す凸型の線「内方線」^{ないほう}を敷設しているが、三国駅にはなかった。ホームに駅員はおらず、車掌も運転士も事故には気付かなか

ったといい、電車はそのまま走り去ったという。／落語作家の男性は「とても慎重な人なのに。方向を見失ってしまったのかもしれない」と話す。（以下略）≡（朝日新聞2008年12月1日号）

昨年十一月末の事故である。

笑福亭伯鶴さんは、上方落語の落語家で、大阪府立盲学校出身の視覚障害者である。私が伯鶴さんの声を聞いたのは、日本ライトハウス発刊のテープ雑誌「声のジャーナル」にお出になっていたときである。その後同誌は、全国貸し出しをしないことになり、耳になくなった。点字新聞の「点字毎日」には、毎月「ごきげんさん」というエッセイを寄せられていた。

点字毎日の報道では、伯鶴さんの怪我は、脳挫傷と両足骨折とある。幸いにして意識は回復し、足の怪我が治り次第、高座への復帰を目指したいと意欲を燃やしておられるという。

右の記事にはその後に、安全対策として点字ブロックの敷設の仕方や、開閉柵の早期の設備などが、提言として取り上げられていた。

一人歩きする視覚障害者（全盲）は、恐らく乗り物の事故に遭った経験のない者はいないと思う。筆者もその一人で、何度かホームから転落している。若い頃は点字ブロックはなかったが、敷設されても、やはり落ちた。

その駅員から言われたことが、今も心に残る。

「点字ブロックがあるのに、なぜ落ちるんですか？」

私に関わっている会社のガイドヘルパーには、視覚障害者がどんな気持ちで一人歩きしているか知ってもらいたいので、時折こんなことを言う。「目を開いて、その上を逸れないように歩いてみて下さい」。どんなことが起こるか試してもらいたいからである。読者諸兄弟にもお試しいただければ幸甚である。

電車の車両の連結部分にホームからの転落防止のカバーが付いた。

視覚障害者は、車両の連結部を開いたドアと間違えることがよくある。乗ろうと思う途端に車両と車両の間に落ち込むのである。落ちないにしてもそのような危険に遭遇した経験のない者はいないはずである。従ってこのような処置は、極めて有効だと言ってよいだろう。というのは、一人歩きの視覚障害者が電車に乗るとき、開いたドアに直進することはまずない。停止した車両を確認して、それに沿ってドアを探す。止まっている車両は、動かずにいる限りホームとの間の幅や人の動きを確認するなどの、安全なガイドになるからである。そうして従来の電車では、連結部を、ドアと間違えて、転落の危険に曝されることにな

る。

ホームに開閉式の柵を設けるというのは、転落や電車との接触事故防止には、極めて有効に違いない。しかし私の知る限り現在設備されているのは、新幹線のホームと、横浜では市営地下鉄の全駅、東京では地下鉄南北線と都営三田線だけである。JRでは、山手線と山手線の内側の駅に設置すると発表しているが、実はまだ先のようなのである。

開閉式の柵の設置を困難にしている理由は何だろう。先ず思い浮かぶのがコストである。相当の金額がかかりそうである。

次に気付くのが、車両の多様さである。私が常時乗降する京浜急行線では、同社の車両だけでもドアの位置の違う車両が何種類もある。さらに都営地下鉄、京成線、北総線と乗り入れているために、他社の車両も走っている。それらのドアの位置はどうなっているのだろうか？

その次は、駅がカーブの場所にあることである。開閉柵の設置を困難にしているかどうかは分からないが、安全性を確保するためには、別の工夫が必要に思われる。

最後に思いつくのが、柵の強度である。横浜市営地下鉄ではさほどの混雑はないように見える。が京急線やJR各線のラッシュ時の混雑は言語に絶するものが

ある。先達てJ R京浜東北線が止まって、京急線に振り替えの乗客が殺到した。その電車に私も乗り合わせてしまったが、電車が弾けるのではないかと心配になったほどの混雑だった。こんな時には柵にも大きな負荷がかかるに違いない。

市営地下鉄に開閉柵が設置されて、思わぬ利点があった。転落と車両との接触の危険がなくなったことから、ホームの幅を、そのまま利用できるようになったのである。柵がなければ黄色い線の内側を歩かなければならなかった（これが視覚障害者にとって一苦勞なのだ）が、柵によって、その内側はどこでも安全になって、結果的にホームの幅が広がったのである。

障害者自立支援法という法律ができた。ガイドヘルプというサービスが、公的なサービスとして運用されるようになった。事業として実施されることから、ガイドヘルパーに課せられる責任は、これまでの付き添いとか介添えとか呼ばれるものより格段に重くなった。

そしてこのサービスは、全国的には地域の格差が大きいこと、利用できる時間が少ないことに加えて、利用内容が余暇や通院に限られていて、職業上の外出や通学には利用できないなどの制限がある。（このサービスについては、稿を改めて考えてみたい。）

今回の伯鶴さんの事故も、制度に暖かみがあれば、なかったものかもしれない、と私は密かに思った。

「東京漢点字羽化の会」例会報告と

わたくし」と

木村 多恵子

第37回例会 2008年12月10日(水) 13:30～

15:30、ヒューマンプラザ第1会議室

「東京羽化の会」の活動も、いよいよ4年目に入った。視覚障害者の方たちとの「漢点字学習会」も、もうじきまる2年になるうとしている。どちらも規定の時間では足りないほど熱心で、しかも和やかに会話も進むのできずまりにはならないのでほっとしている。これまでに入力していただいた本の校正を本格的に仕上げなければならない。特に固有名詞は丁寧に見る必要があるそうだ。

学習会もレーズライターで漢字を大きく書いていただいているので、字式の説明を聞きながら、少しずつ文字の構成が分かってきて興味が増している。

12月20日の学習会は、いつもより早い時間から学習を始め、学習後に忘年会をした。会長がわたしたちに手頃な安価で美味しいお店を探してくださいだったので、大いにのみ、食べて、皆満足した。

2009年はもう少し学習者が増えて、漢点字で本を読む楽しさを分かって下さる人が増えたらいいと願っている。

第38回例会 2009年1月21日（水）13…30

15…30 ヒューマンプラザ7階竹芝小記念ホール
NHKわかば基金から頂いたパソコンを、その後どう活動に生かしているか、パソコンを使用しているところも撮影し、添付してその報告書を提出しなければならぬ。基本的には皆様は、それぞれご自宅で、入力、調べ物、学習会のための資料づくりが多く、例会ではそれぞれの確認調整が多い。そんなこんなを会長にまとめていただくようお願いした。

漢点字の価値をどうやったら、点字使用者、教育関係者をはじめ、一般の人にも伝えられるか話し合った。

わたしが一番残念に思うことは、せっかく美味しい知識のご馳走が目の前に置かれている、あるいは鼻や口の前でブラブラしているのに、多くの視覚障害者やその関係者は、気づかないのか、または敢えて気づかないふりをしている現状である。

漢字の学習は、子供の時から始めていれば、漢字

（漢点字）をゆっくりゆっくり覚えてゆけばよいのであるから、それはなだらかな道であるが、大人になって、社会的な仕事をしながら、いきなり漢字の脅威にさらされて、慌てて漢字（漢点字）の勉強をするというのは、険しい山道をフウフウ息を切らしながら登って行くようなものである。その理を知らながら避けている、子供たちに遠回りをさせている大人の責任をもつともっと実感して欲しい。

羽化の会員の皆様の、こんなに大きな力と努力が今現在、わたし一人でさえも有意義で、有り難いことと思っているのであるから、もっと多くの人びとに漢点字で読む喜びを知って欲しいのである。

ルイ・ブライユが6つの点で点字を作り、石川倉次が日本点字に翻案してから百数十年、そして今漢点字がこれだけ体系的に整備され、整えられてきているのであるから、漢点字を見過ごしにしている愚は大きな損失である。

2009年1月4日は、ルイ・ブライユの生誕200年の記念日である。それを記念するかのように、「横浜漢点字羽化の会」と平凡社のご協力により、『常用字解』（白川静編 2003年 平凡社）が、漢点字訳の完成に至った。これまでの、単に漢点字で読むだ

けではなく、わたしたちも実際に漢字の辞典として使うことができる。

同じように、『常用字解漢点字版』に倣って、「東京漢点字羽化の会」でも、白川静監修、山本史也著『神さまがくれた漢字たち』を漢点字訳してください。これは、小学校高学年から、中学生を対象にしたもので、白川静氏が『常用字解』の「はじめに」のなかで、「小学生用に漢字の知識と古代社会について理解しやすいものを、別に用意したい」と述べていたものだと思う。したがって、わたし自身は『神さまがくれた漢字たち』から読む方が順序だと思う。

* 予告

2月の例会(第39回)

2009年2月18日(水) 13:30~15:30

7階第1会議室

第23回学習会

2009年2月21日(土) 18:30~20:30

港区ヒューマンプラザ7階第1会議室

3月の例会(第40回)

2009年3月11日(水) 第1会議室

第24回学習会

2009年3月21日(土) 18:30~20:30

わたくしごと

『常用字解』のEIBファイルが届けられた。勿論漢点字データの、著作権保護のデータである。著者の白河静氏の「はじめに」を読み始めた。「中・高校生を対象に書いた」とあるが、どこまで追いついて行けるか大いに心配である。わたしの、飲み込みの悪い非効率なやり方にせよ、この指を使わなければ何の意味もない。たとえ少ししか分からなくても、それこそ見ずにいるのはもったいない。

まず、東京点字出版所の『点線文字・常用漢字編』の第1巻を手元に置いた。1ページを開く。そして、「亜」の角張った直線だけの形を指でたどる。勝手に画数を数える。横棒がある。その下に横長の四角がある。その下にもう1本横棒がある。上の横棒と一番下の横棒を結んで、2本の縦線がある。以前に教えていただいた、この文字の筆順を思い出しながら数える。7画。

さて、どうだろう。今度はピンディスプレイに表示されている常用字解の「亜」の項を見る。

「亜」 7 (亜) 8

と、常用漢字と旧字体が、それぞれその画数と共に並んでいる。

2行目を見ると、

一・“口／＝”・一

とある。これは、上下に横線があり、その間に“

の中は横長の口と2本の縦線とが“／”の記号で重なっていることを表している。上下の横線との間は「・」で結ばれているが、これは2本の縦線とくっついていてことを表している。これは川上泰一先生が最初に考え出された、数学の数式の表記法を応用した「字式」である。これは、漢字を構成するパーツの位置関係を、上下左右の関係として、数学記号を利用して表すものである。

『常用字解』の三行目を見ると、

ア (阿克 つぐ)

次の行から、この文字の解説に入り、次に用例が書いてある。

つまり、見出し文字のところで、漢点字だけでなく、その漢字の形が、どのような漢字で構成されているか、分かりやすいように、説明を加えているところが、「横浜漢点字羽化の会」が、この字典の漢点字入力を成し遂げた、画期的な成果であり、大きな特徴である。

たとえば「悪」の漢字の字式は、

亜／心

とあり、この「／」は、上下の関係を表している。

また「相」は、

木＋目

「暗」は、

日偏＋音

と、横並びになっていることを示している。

もちろん、漢字の構成は、そんなに簡単なものばかりではないが、このように漢字のパーツを用いて、少しでも、漢字の形が解りやすいように、そして、白川先生の「漢字の成り立ちとその意義」を想像し、理解できるように、各所に驚くばかりの工夫がなされている。

第一、『常用字解』の本文、特に文字の成り立ちの解説を読んでいると、本当に古代の人びとの、「死者」にたいする恐れ、恐怖の思いは並々ならぬ物があったことが想像できる。どうしたならば、生者を脅かさずに、死者の靈魂を鎮めることができるだろうかと、悩み続けてきた長い長い歴史の後のように思える。

「哀」の解説を見ても、「衣と口を組み合わせた形。口は【サイ】で、神への祈りの文である祝詞（のりと）を入れる器の形。人が死ぬと、死者の衣の襟もとにサイをおいてお祈りをする。こうして死者をあわ

れみ、死者の魂をよびかえす招魂という儀礼を哀とい
い、あわれ、あわれむ、かなしい、の意味に用いる」
とある。

また、死者の埋葬されているところを忌みきらい、
謹み、それが「にくむ」と変化してゆくのも自然な流
れのように思える。

古代の人々は現代のわたしたちより命を大切にしてい
たのではないだろうか。現在より人口も少なかった
であろうし、病気や怪我や自然災害も、現在よりはる
かに多く、絶えず危険にさらされていたはずである。
家族、あるいは少数単位の仲間の生活を維持してゆく
ためには、労働力も一人一人が重要なメンバーであつ
たはずである。恐らく招魂も蘇生の儀式も、族長の盛
大なものとは規模はまるで異なるにせよ、小さいなが
ら、似たような儀式を行っていたのではないだろう
か。

『常用字解』のほんの入り口に、そう、ほんの少し
覗いただけで、なんだかおもしろいような怖いよう
な、何処まで使いこなせるか、不安とドキドキを一緒
に抱えているわたしである。

横浜羽化の皆様、大変なお仕事を仕上げてくださ
いましてありがとうございます。

2009年1月26日

東京漢点字 学習会報告

東京漢点字羽化の会 菅野良之

20年度 第8回（第20回）報告

1 日時 平成20年11月22日（土）

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室

3 出席者（省略）

4 教材 「漢点字講習用テキスト 初級編

第二回（全十回）」点字編、墨字編

レーズライター…恋、戀、芸、藝、会、會、絵、

伝、傳、転、轉、秋、烟

5 学習会内容

（1）漢点字講習用テキスト 初級編

第三回（全十回） 点字・墨字配布

（2） 前回の復習 テキスト第二回、

3 複合文字（1）

「加」、「賀」、「化」、「

「花」、「貨」「

賀、貨の「貝」は元はお金で、富みや商

品・財産を表す。

(3) 今回の学習内容 『漢数字及び第一基本文

字を部首とした文字(4)』

漢点字編 p102 墨字編 p41

* 言 (; 1・2・4の点)、云 (; 3、1・

2・4の点) を含む文字。

・ 言 を含む文字。

63 「信 (; 1・3の点)」 人偏 (; 1・3の点) と言 で表

す。欺かないという意味。音読みのシンは漢・呉音、

訓読みに「たより」がある。熟語に「信心」「信者」

「信念」「信望」「信義」「信託」「確信」「通信」

「発信」「送信」「受信」「過信」「迷信」などがある。

64 「恋 (; 1・2・4の点)」 上部は「亦(マタ)」であるが、

旧字の「戀」から言 (; 1・2・4の点) と心 (; 2

・5・6の点) で表し、左右の「糸」は省略してい

る。音読みのレンは漢・呉音。熟語に「初恋」「恋恋

(レンレン；思い焦がれてあきらめきれない)」「初

恋(はつこい)」「恋旧(レンキュウ；昔のことをな

つかしむ)」「恋著(れんちゃく；何かに思い焦がれ

る)」「恋人(こいびと)」など。

・ 云 を含む文字。

65 「芸 (; 1・2・4の点)」 草 (; 1・4・6の点) と云

(; 1・2・4の点) で表す。旧字は「藝」

で、草木が芽吹いて伸び始める形を意味する。丸は勢
いとか熱を意味している。音読みのゲイは漢音、ゲは
呉音。熟語に「芸達者」「芸者」「工芸」「武芸」
「手芸」「曲芸」「学芸」「無芸」などがある。他の読
み方として「安芸(あき)」がある。なお、草冠が付
く字にも、草木とは無縁な「難」「漢」「苛」「苦な
どがある。

66 「会 (; 1・2・4の点)」 三角屋根 (; 1・2・5の点) と

云 (; 1・2・4の点) で表す。旧字は「會」

で、三角屋根は何かをふたをするという意味がある。

音読みのカイは漢音、エ・ケは呉音。熟語に「会见」

「会食」「会長」「会館」「集会」「機会」「照会」

「再会」「大会」「司会」「例会」「面会」「宴会」

「都会」など多数あり、エでは「会得」「会釈」「会

者定離」などがある。訓読みの「あ・う」はほかに、

「合う」「遭う」「逢う」「遇う」がある。

・ 会 を含む文字。

67 「絵 (; 1・2・4の点)」 糸 (; 1・2の点) と会 (; 1・2・4の点)

で表し、会の三角屋根の部分の省

略。旧字は「繪」である。音読みのカイは漢音、エは

呉音。熟語には「絵図(エズ、またはカイズ)」「絵

心(えごころ)」「絵描(えかき)」「墨絵(すみ

え)」「影絵」「絵姿」など。表現方法として「絵に

描いたよう” “絵になる” などがある。

(4) その他

次回(12月)は、20日(土)午後5時30分から学習会を行い、午後7時から忘年会を開催する。会場は「包丁や」芝大門店。

20年度 第9回(第21回) 報告

1 日時 平成20年12月20日(土)

17時35分～19時37分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室

3 出席者(省略)

4 使用教材 「漢点字講習用テキスト 初級編

第二回(全十回)「点字編、墨字編

レーズライター…炎、談、点、然、燃

5 学習会内容

(1) 前回の復習 テキスト第二回

3 複合文字(1)

「信」字式は人偏十言。「芸」字式は草冠

／云。「会」字式は、ヤネ／云。「絵」中

国の春秋時代に絵が描かれ始めた。糸や布のふち飾りが最初で布に模様を描き次第に字に変遷していった。

字式は、糸十会。

(3) 今回の学習内容 『漢数字及び第一基本文字を部首とした文字(4)』

* 墨字は云(3の点とエ；1・2・4の点)

を含むが、漢点字では旧字に含まれる専の形を使う文字2つ。

68 「伝」旧字の「傳」から、人偏(1・

3の点)と専(1・2・3・4・5の点)で表す。

音読みのデンは呉音、テンは漢音。字式は、人編十云。熟語に「伝令」「伝授」「伝奇」「伝承」「伝票

」「伝聞」「口伝」「自伝」「宣伝」「伝馬船(てん

ません、またはでんません)」など。

69 「転」旧字の「轉」から車偏(1・3

・4・5・6の点)と専(1・2・3・4・5の

点)で表す。音読みのテンは漢・呉音。車のようには

ころころ転がるという意味がある。字式は車十云。熟

語に「転用」「転送」「転変」「好転」「公転」「自

転」「栄転」「逆転」「流転」「起承転結」「動転

」「転落」など多数ある。

・火(3・4・5・6の点)を含む文字。

70 「秋」ノ木偏(2・3・4の点)と火

(3・4・5・6の点)で表す。字式は、禾十火。

旧字は「穰」。亀は害虫を意味し、作物の収穫後に田畑を燃やし害虫を駆除して翌年に備えるという意味を

持つ。音読みのシュウは漢・呉音、シュに呉音がある。熟語に“秋分”“秋色”“秋芳（秋に咲く花で菊）”“千秋”“中秋”“秋気”“秋娘（しゅうじょう：美人。または年とつて容色の衰えた女性）”“秋霜烈日”などがある。他の読み方として“秋刀魚（さんま）”がある。

71 「烟^{...}」 火^{...}（3・4・5・6の点）と田^{...}（1・3・5の点）で表す。国字である。字式は、火十田。熟語に“烟違い”がある。

72 「炎^{...}」 火と火で表す。元の字は火を三つ合わせた形で、火の粉が飛んでいる様を表す。字式は、火／火。音読みのエンは漢・呉音、タンの読みもある。熟語に“炎上”“火炎”“胃炎”“肺炎”“炎涼”“炎炎（エンエンまたはタンタン）”。別の読み方に“陽炎（かげろう）”がある。

・炎^{...}（3・4・5・6の点と、3・4・5・6の点）を含む文字。

73 「談^{...}」 言^{...}偏（1・2・4の点）と炎^{...}（3・4・5・6の点、火^{...}一つは省略）で表す。字式は、言＋炎。音読みのダンは呉音、タンは漢音。熟語に“鼎談（ティダン）”“冗談”“対談”“怪談”“美談”“密談”“座談”“談判”“縁談”“

漫談”などがある。

* 列火（文字の下に四つ点がつく形）で火^{...}（3・4・5・6の点を意味する）を含む文字。

74 「点^{...}」 占（1・2・4・5の点）と烈火^{...}（3・4・5・6の点）で表す。元は黒（火を燃やしたあとの煤）で黒いものが点々という意味。字式は占／烈火^{...}。熟語に“点検”“合点”“争点”“盲点”“弱点”“重点”“要点”“点心”“点字”“点呼”“点晴”“点滴”などがある。

75 「然^{...}」 上の部分は「肉^{...}」と「犬^{...}」で構成されているが、犬^{...}（1・2・4・6の点）と烈火^{...}（3・4・5・6の点）で表し、肉の部分は省略されている。犬の肉を火であぶることを意味している。字式は、（肉月十犬）／烈火^{...}。音読みのゼンは漢音、ネンは呉音。熟語に“必然”“平然”“未然”“依然”“愕然”“超然”“然る可し（しかるべし）”、他の読み方に“徒然（つれづれ）”などがある。

・然^{...}（1・2・4・6の点と、3・4・5・6の点）を含む文字。

76 「燃^{...}」 火^{...}偏（3・4・5・6の点）と然^{...}（1・2・4・6の点）で表す。然^{...}の烈火^{...}は省略。字式は、火十然。熟語に“再燃”がある。

府西池

白居易

春	今	池	柳
風	日	有	無
春	不	波	氣
水	知	紋	力
一	誰	氷	枝
時	計	尽	先
来	会	開	動



府西の池

白居易

柳に氣力無くして枝先ず動き

池に波紋有りて氷尽く開く

今日知らず誰か計会なるぞ

春風春水一時に來たる

府西Ⅱ「府」は役所。役所の西方。
先動Ⅱ（柳の枝が）まっ先に動いた。
四句目の「春風」を暗示している。
計会Ⅱ計画した。くふうして合わせた。

だらりとたれさがった柳の枝がまず動き、池に波紋がゆれて、氷はすっかりとけた。今日（の立春の日）、だれの計らいでこのように合わせたのか、春の風と春の水が同時にやってきた。



府 西 ノ 池 白 居 易

柳 ニ 無 クシテ 氣 力枝 先 ヅ 動

キ

池 ニ 有 リテ 波 紋 氷 尽 ク 開 ク

今 日 不 知 ラ 誰 カ 計 会 ナル ゾ

春 風 春 水 一 時 ニ 来 タル

* 「漢文のページ」の点字は、隔月発行の漢点字雑誌『横浜通信』で読むことができます。

* 漢点字訳では、右ページのような訓点付きの漢文は、上記の点訳の他に、もとの漢字のみの白文も付けています。白文は、漢字一文字ずつあけて書いています。

府 西 池

白 居 易

柳 無 氣 力 枝 先 動

池 有 波 紋 氷 尽 開

今 日 不 知 誰 計 会

春 風 春 水 一 時 来



漢点字講習用テキスト

初級編 第十三回

3 複合文字 (1)

4. 漢数字および第一基本文字を部首とした文字 (6)

(71) 畑  はた はたけ

「火偏」の右側に「田

」を置いた形の文字です。「田

」は、耕地全般を表す文字で、ここでは水を張らない耕地、すなわち「はたけ」を表しています。「はたけ」は、土地に生えている草を火で焼いて、害虫駆除と灰を肥料にする焼き畑から始まりましたが、この文字はそこから生まれた国字です。また現在では、波及して、学問や技術の専門分野を「はたけ」と呼んでいます。漢点字では、「 (火)」と「 (田)」で表されます。

「畑作」「畑地」「田畑」「技術畑」「営業畑」

(72) 炎  エン ほのお ほむら

「火

」を縦に二つ並べた形の文字です。火が盛んに燃えている様子を表しています。また熱を発散することから、熱性の病気も意味します。漢点字では、「火」を二つ並べて表されます。

「炎熱」「炎症」「炎暑」「炎天」「アレルギー性鼻炎」

・「炎

」を含む文字。この部首の音は、「だん、たん」。

(73) 談  ダン タン かた - る

「言偏」の右側に「炎

」を置いた形の文字です。炎が燃え上がるように、盛んに話をする様子を表した文字です。また、人の前に立って話す話、人から聞き取った話、相対してする話等、話全般に用いられる文字です。漢点字では、「 (偏)」と「 (炎)」で表されます。

「談話」「談合」「談笑」「相談」「面談」「講談」「商談」

※ 部首の「列火」を含む文字。「列火」は、文字の下の部分に四つの点が並んだものです。この部首は、火の燃える様を象ったもので、漢点字では「

」で表されます。

(74) 点  テン とも - す とも - る
つけ - る た - てる

「卜」の下に「口

」の形の文字「占」、その下に四つ点の列火「

」を置いた形の文字です。小さなテンを意味します。点数の形で、評価の



表現として用いられます。また、一つだけぼつんと離れている様子、ものや人が散らばっている様子を表します。さらに、灯りを「ともす」、火を「つける」、お茶を「たてる」とも用います。漢点字では、「𠄎 (占)」と「𠄎 (列火)」で表されます。「ト」は省略されます。

＊ 「𠄎𠄎𠄎」、「セン、しめる、うらなう」は、中級編でご紹介します。

「点字」「点灯」「点火」「点数」「得点」「欠点」「灯を点す」「火を点ける」「野点てをする」「お茶のお点前」

(75) 然𠄎𠄎 ゼン ネン しか - り

しか - るに しか - し

この文字は、上の部分の右側に「犬𠄎」、左側に「肉𠄎」を置いて、その下に列火「𠄎」を置いた形です。犬は神聖な動物とされて、その肉を火であぶって吉凶を占いました。「しかり」と肯定したり、「しかし」と否定するのに用いられます。また、総体的な状態や姿・態度を表す語としても用いられます。漢点字では、「𠄎 (犬)」と「𠄎 (列火)」で表されます。「肉𠄎」は省略されます。

「当然」「偶然」「断然」「陶然」「天然自然」「全然 … ない」

・「然𠄎𠄎」を含む文字。

(76) 燃𠄎𠄎 ネン も - える も - やす

「火偏」の右側に「然𠄎𠄎」を置いた形の文字です。「然𠄎𠄎」には、火で焼くという意味があって、そこにさらに「火偏」を添えて、炎を上げ、高熱を放散しながら燃え上がる様子を表す文字です。漢点字では、「𠄎 (火偏)」と「𠄎 (然)」で表されます。

「燃焼」「燃料」「可燃物」「内燃機関」「燃えるゴミ」「燃えないゴミ」

※ 「口𠄎」を部首として含む文字。

(77) 品𠄎𠄎𠄎 ヒン ホン しな

「口𠄎」を、上に一つ、下に二つ、三角形に三つ並べた形の文字です。「しな」と読んで、色々な「もの」を示します。また、「ヒン」と読んで、人や物の等級や価値を表す意味があります。この文字を構成する「口𠄎」は、古く中国で、祭祀で神様に捧げるお祈りを容れた器を表していると言われます。漢点字では、木が三つの「森𠄎𠄎」と同様に、「𠄎 (口)」と「𠄎 (三つ)」で表されます。

「品目」「品質」「品種」「品格」「物品」「納品」「上品」「人品骨柄」「品物」「品揃え」

「報告とご案内」

一 国際善隣協会から

お招きをいただきました



この度、横浜国立大学の村田忠禧先生がご推薦下さり、社団法人・国際善隣協会で、漢点字のお話しをさせていただくことになりました。同協会は、中国との文化交流に力を注いでおられます。日程等は、以下の通りです。

会場・・ 社団法人・国際善隣協会五階

〒105-0004 東京都港区新橋 一・五・五

電話 03-3573-3051 (代表)

URL: <http://www.kokusainzenrin.com/>

日時・・ 二〇〇九年四月二十四日(金)

一三:三〇～一五:〇〇

演題・・ 視覚障害者と漢字―漢点字とは何か

* 詳細はホームページをご覧ください。か、本会までご照会下さい。

二 『常用字解』を図書館へ納入

前号でもご案内致しました通り、『常用字解』(白

川静著、平凡社)の前半一〇巻の漢点字訳を完成し、横浜市中央図書館に納入致しました。近く書架に並ぶものと存じます。有効にご利用下さい。

一〇巻の内容は、「亜」から「籍」です。

後半は、二〇〇九年度の分として納入致します。現在最終作業を進めております。

ご期待下さい。

三 新年会を行いました

例年のように、一月二五日(日)、一三:三〇から、本会と東京漢点字羽化の会の新年会を行いました。横浜市議の大滝正雄先生も駆けつけて下さり、漢



新年会で挨拶する岡田代表(上)と
参加者の皆さん(下)

点字の学習者の方や、横浜トランスファのメンバーと東京のガイドヘルパーの皆様とともに、和やかな時を過ごすことができました。一年のスタートとして、有意義な時間となりました。

よい年になることを祈念して終えることができました。

四 漢点字訳書

今回『常用字解』の前半の漢点字訳が完成しましたが、本会の活動は十二年前の、『漢字源』（藤堂明保編、学習研究社）から始まりました。これで二つの性格の違う、また代表的な漢和辞典を世に問うたこととなります。

以下に、これまでに本会が漢点字訳した、代表的な書物を挙げます。その他にもプライベートなニーズにお応えしたり、教科書や問題集なども試みました。また月刊の漢点字書や本誌の刊行も行って参りました。これらは漢点字訳ボランティア活動の成果の一部です。

ご支援を賜わる皆様と読者の皆様に支えられて、今後も活動して参ります。

よろしくお願い申し上げます。

（著者・編者の五十音順）

白描―明石海人歌集、明石海人、明石海人顕彰会

侏儒の言葉、芥川龍之介、岩波文庫

アメリカはカースト社会、生田典子、武蔵野書房

微苦笑俳句コレクション、江國 滋、実業之日本社

日本語練習帳、大野晋、岩波新書

句読点活用辞典、大類雅敏、栄光出版社

論語、金谷治・訳注、岩波文庫

作歌の現場、佐佐木幸綱、角川書店

母なる色、志村ふくみ、求龍堂

孔子伝、白川静、中公叢書

初期万葉論、白川静、中公叢書

新潮名作選―百年の文学、新潮社

百人一句、高橋睦郎、中公新書

珠玉百歌仙、塚本邦雄、毎日新聞社

地名苗字読み解き事典、丹羽基二、柏書房

新々百人一首、丸谷才一、新潮社

近代日本語の思想―翻訳文体成立事情、

柳父章、政法大学出版局

本と人をつなぐ図書館員、山内薫、読書工房

唐詩選、吉川幸次郎編集、筑摩書房

生麦事件、吉村昭、新潮文庫

編集後記

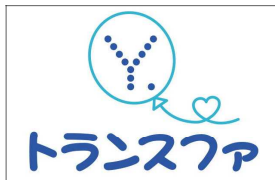
▼今年度の図書館納入漢点字書の製作は、編集作業の關係で少々遅い時期となり、秋の

予定が一月にずれ込みました。紙折り・のり付けの作業は一番手間のかかる工程で、会員の皆さんに私の自宅に集まっていたき、一斉に作業を行います。全くの手作業のため、なかなかきれいに仕上げるのが難しいもので、皆さん苦労しています。更に、これに表紙付けを行うのは、少々のも熟練を要することなので、なかなか手を出していただけなくて、結局、私が一人でやってしまうことになりました。それも、均一な品質に仕上げるのは難しく、苦勞の種となっています。それでも今年も何とか十冊を仕上げ、中央図書館に送り出して、ほっとしたところです▼そのあとすぐに、恒例の羽化の会新年会で、桜木町のワシントンホテルのレストランに26名の方が集まりました。ここ数年間、このレストランがお気に入りでも使わせてもらっています。この日は快晴で、窓から見えるみなとみらい地区の景色がすばらしいものでした。岡さんがそれを今回の表紙絵とされました。岡さんは特殊なご病気で、両手の親指に痛みを感じ、絵を描くのも大変なご様子、これ以上病状が悪化しないよう、祈るのみです。(木下 和久)

(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象者は、横浜市在住・在宅の、重度障害者（視覚・肢体・知的）です。

常時募集・ガイドヘルパー： ホームヘルパー2級以上の有資格者。
障害者の外出支援をお願いします。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>

《表紙絵 岡 稲子》

今回の発行は4月15日です。

※本誌(活字版・テープ版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。